
GS - 舞 -

Saya

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G S - 舞 -

【Nコード】

N 1 2 3 7 S

【作者名】

S a y a

【あらすじ】

以前ネット上に掲載していた、G S美神の『舞シリーズ』です。新しい話も少しずつ掲載していく予定です。

乞巧奠の舞（前書き）

かなり前の文章なので、粗が目立っていますがご容赦ください。

乞巧奠の舞

四方に篝火が焚かれた舞台の中心に舞う白い影。

この場に存在する何十という観客を魅了し、踊り続ける。

人は息を殺し、木々はざわめくのをやめ、森に巢食う霊は還っていく。

風は舞台の中心から、清浄な空気を運ぶ。

（アレハダレダ）

魔物は恋焦れる。

決して届かない、切なる願い。

（ウソダ）

人は認めない。

あれが自分と同じヒトであると認めたくない。

舞台の、中心にいる影が余韻を残して舞を終える。

己を見ているすべてのものに、礼を奉げる。

呪縛は解けたというのに、動けない。

一様に時が止まったように、固まっている。

舞台の主役が姿を消して数分後。

静寂に包めれていたはずの空間は、地を揺るがすような叫びと共に時を取り戻した。

七夕、別名乞巧奠^{きこうでん}。

いつもの美神事務所に場違いともいえる依頼が飛び込んできたのは、

七夕まで後10日といった雨の日であった。

場違いな依頼の出所は、例によって例のごとく、オカルトGメン・
・ではなくおキヌからであった。
曰く、『クラスメイトに神社の娘がいて、霊力の強い舞を舞える人を探している』との事。

残念ながら、六道女学院には両方の条件を満たす人がいなかった。

それでも、通常の祀りであれば何とかなった。

だが今回は、100年に一度の大いなる鎮魂を兼ねた祀り。

どうしても、両方の条件を満たす人が必要だったわけなのだが・・・
簡単に見つかるわけではない。

霊力の最低ラインが高すぎる事がネックになっている。

ギリギリおキヌであれば、霊力に関して条件があっているのだが、
彼女はほとんど舞を舞ったことがない。

たった10日で、神を『魅せる』事ができる所作を身につけるのは
不可能といってよい。

結果、クラスメートが協力して手当たりしだい心当たりを探ること
になった。

だが、成果はない。

もちろん、今回の祀りの主催者たる神社の神主も心当たりは当たっ
ている。

だが、100年という時の流れは無常で、力を持った舞手はその数
を僅かに残しているばかり。

しかも、かなりの高齢者が多く満足に身体が動かない者が大多数を占める。

そこで、おキ又は霊力だけであれば業界トップクラスが集う、事務所話を持ちかけた。

みな、運動神経はいい。

そして、霊力は完全にラインを超えている。

後は、舞を舞うための基本ができていればいいだけだ。

おキ又は話を持ちかけると、

美神は渋い顔をして、首を横に振り、

シロは、役に立てないことに対して頂垂れ、

タマモは、『記憶』が戻ればと、呟いた。

おキ又は僅かに落胆した様子だったが、にっこりと笑い、『気にしないで下さい』と言おうとした。

だがそれは、今まで口を閉ざしていたもう一人の事務所のメンバーによってさえぎられた。

「おキ又ちゃん。それって女の人だけ？」

彼以外のメンバーは一樣に目を見開いた。

彼は、そんな様子に苦笑をこぼすと、おキ又を真っ直ぐ見つめて、再度尋ねた。

「俺、今同居人に舞を習っているんだけど、ダメかな？」

おキ又は慌てて、『聞いてみます!』と言って部屋を出て行った。
残ったメンバーに、なんともいえない沈黙が落ちる。

「先生! 舞が舞えたのでござるか?」

最初に沈黙に耐えられなくなったシロの言葉で、他の人が驚愕から
引き戻される。

「そうよ。いつの間に・・・」
「聞いてないわよ」

曖昧な笑みを浮かべる彼に3人が詰め寄ろうとすると、飛び出して
いったおキ又が帰ってきた。

「是非ともお願いします、だそうです」

結局、横島が舞を習い覚えた経緯について、聞き出すことができず
に終わった。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

乞巧奠当日。

横島の舞を一目見ようと、トップクラスのGSたちが集まった。

友人を案じているもの。

からかう為に来たもの。

純粹に楽しみにしているもの。

仕方なく来たように振舞っているもの。

思惑はさまざまなれど、ただ、横島を見るためという目的は同じ。

普段はいがみ合っている人も、この場に彼がいないと、どこか控えめでおとなしい。

そして、舞台に篝火が焚かれ主役が姿を現す。

トレードマークの赤いバンダナはなく、白い狩衣を纏って礼を奉げる。

お囃子の音すらなく、舞が始まる。

あとには、静寂が支配する。

- e n d -

星供の宴（前書き）

前回から一カ月後です。

星供の宴

乞巧奠きこうでんの舞を行ってから、横島の周りは騒がしかった。

熱のこもった視線で見られるのはまだいいほうで、女物の和服を片手に追いかけれ数人がかりで服を無理やり着替えさせられそうになり、必死で逃げ回る日が続いた。

さすがに女好きの横島も、この状況には辟易していた。

さしずめ、自分が追い回すのはいいが、追い回されるのは嫌だということだろうか。

ただ、救いだっただのはこの状況で『舞を舞う』という依頼が1件も入らなかったことぐらいだろう。

一説には、彼に近い者が自分たちだけのものにする（ライバルを増やさない）ため、裏から情報操作をしたとあるが、真実は定かではない。

また、以外にも美神が職権乱用のごとく横島に無理強いを迫ることもあまりなかった。

たまに、事務所でお酒を飲むとき冗談に紛らわしたように強請られるぐらいだったのだ。

だがそれも、横島がやんわりと拒否をするとそれ以上言葉を重ねることはなかった。

余談であるが、乞巧奠の舞のDVDが横島の関係者には渡っている。あの場にビデオカメラ等の持ち込みは禁止だったのだが、マリアがいたため映像として残ったのだ。

経費を差し引いても、かなりの額がカオスの手に渡ったらしい。少なくとも、滞納していた家賃はすべて払えたようだ。

またこのDVDには細工がなされていて、不正に焼き増しをしようとする映像が消えてしまう仕組みになっている。

プログラムを組んだのは、もちろん横島の同居人及びその人界での協力者だ。

この事実を横島は知らない。

それはさておき
閑話休題

実際に舞を見た者は、渋々ながら強硬な態度を崩さない横島に無理強いをすることをあきらめたが、諸事情により見に行けなかった方々はあきらめきれぬ訳がない。

騒ぎの後、妙神山に修行に来た横島を待っていたのは、いつものパピリオのタックルではなく、にこやかな笑顔を浮かべた小竜姫、ワルキューレ、ベスパ、パピリオ、ヒヤクメとその後ろで怯えながら熱い視線を向けてくるジークがいた。

乞巧奠の舞を見学に行けなかったメンバーである。

更にいえば、たまたま（？）横島をトレースしていたヒヤクメがいなかったら、映像ですら見ることは叶わなかったのだ。

このときばかりは、盛大に感謝され、しばらくの間待遇がかなり良かったらしい。

横島はなんとなく怖くなって、修行をせずに帰ろうとしたが、そうはいかない。

小竜姫の超加速で背後に回られ、首筋に手刀を入れられ、気絶したところを縄でぐるぐる巻きにされ奥へと運ばれた。

横島のそばにライはいたのだが、害意はないことと、この場合下手に助けようとする余計に悪化すると判断した為、沈黙していた。

そして、目が覚めた横島を待っていたのは『お願い』の嵐である。

特に武等派の面々は、武が舞に通ずるといったこともあって、是非とも実際に見なければならなかったと言い募った。

そういう理由ならばと、横島は今度は妙神山で舞を披露する約束をした。

プロ以上の目から、どの程度身についているか批評してもらいたかったということもある。

縁の薄い神相手には舞えて、自分たちには駄目なのかといった嫉妬も多分に含まれているのだが、横島はそこまでは気付かない。

この辺りは同居人のおかげで、幾分鋭くなったとはいえ前のままだ

といえる。

準備のため、舞の披露は旧七夕にされることになった。

本当はすぐにでも舞って欲しかったのだが、猿神に諭され涙を呑んだらしい。

ゲーム猿と化しておらずこの『お願い』の場にいたのは、彼も興味があつたからだろう。

承諾後縄を解かれ、いつものように修行が行われたが、帰宅する際に猿神を除く全員に指きりげんまんを強要されていた。

横島は困っていた。

半強制的にとはいえ舞を披露する約束をしてしまったのだ。

約束した以上、手を抜いたものは見せられない。

それに『楽しみにしている』といってくれた皆をがっかりさせるのも嫌だった。

こういうところが横島の横島たる所以である。

がっかりなどするはずがないのだ。

そもそも彼女らにとっては、舞に限らず横島が自分（達）のために『何か』をしてくれるということが一番重要なのだ。

帰宅後、式神に憑依する前の本来の姿になったライと、横島から説明を受けた舞の師匠は大爆笑した。

たまたまその場にいた、このアパートの本来の持ち主の妹でもある少女もだ。

彼女は姉が望の人界での協力者でもある為、事情もある程度は知っている。

だからこそこの場に同席を許されており、今回の愉快的顛末を聞くことができた。

横島は無然とした表情になったが、止める術がない。

望とライは言うに及ばず、少女―阿南綾華あなんりょうか―も体術と身体能力だけなら横島の軽く上に行く。

それだけでなくとも横島が、通常時女性に逆らえるはずもない。

おとなしく笑い終えるまで待つしか手段はなかった。

結局、ひと段落着くまで10分以上の時間を要した。

「楽しいそうですね。それでどんな舞を披露することになったのですか」

微妙に表情は歪んでいるが、笑いを治めた声で問いかける。
口調にどこか面白がっている雰囲気があるのは否定できない。

「だから相談したいと思って話したんツス。
・・・なのにいきなり爆笑するなんて」

この二人相手にいじけても仕方ないとわかっているため、特に床に愚痴るわけでもなく真っ直ぐ返す。

言葉に多少とげが含まれているが、些細なことを気にするような繊細な者はいない。

「悪かったの。後、舞の件だが妙神山であろう。
ならば、何か武器を使うのが良いかもしれぬの」

観客（予定者）には武に通じるものが多い。

この意見はある意味もつともであり、また危険でもある。

少なくともある一定以上の技量がない者には無謀でしかない。
普通ならば。

幸いにしてこの場にはそんなことを気にする者はいない。

「ならば“猫”などいかがでしょうか。

演舞の題材としては申し分ないと思います。

それから、今回は音楽もあつたほうがよろしいかと存じますので、シガさまとライさんが伴奏をなさいましたらよろしいのではありませんか」

シガさまが横島さんの護衛だと紹介されてませんでしょう、と朗らかに言う。

GS（の卵候補でも）ない為、妙神山に行く理由がない彼女には所詮他人事。

綾華の発言に横島は期待を込めて望を窺う。
どうせならば誰か道連れがいるほうが心強い。

望は軽く息を吐くと、仕方なさそうに首を振った。

「おぬしにも、練習には付き合うのだぞ」

綾華が行かないことに関しては承知しているが、さらしものになるのは気が進まない。

せめてもの反撃にと、協力を要請する。

「もちろんさせていただきます」

につこりと微笑んだ綾夏の手には、飾り気のない矛が握られていた。

「剣の方がよいのではないか」

なぜなら、“猫”は剣の名手であるからだ。

矛も扱えないこともないだろうが、有名なのは剣だ。

「複数で舞うのであればそのほうがよいでしょうが、今回はお一人です。」

それに、小竜姫様は神剣の使い手と聞いております。さすがに今回は控えたほうがよろしいかと存じます」

それともシガさまが相手役を勤められるおつもりですか、と暗に問う。

受ける気がないのが分かっている為、多少のあてつけも含まれる。

「そうだの。まあ主役は忠夫だからの。」

わしは裏に回るよ」

顔見世も含まれているとはいえ、必要以上に目立つのは嫌なのだ。ましてや、顔見知りが（一人とはいえ）いる場では尚更だ。

「衣装も用意させていただきます。」

横島さんも、あちらで用意された衣装はおそらくお気に召さないと思いますから」

そうして、主役を置き去りにして舞の方向性は決定していた。

しばらくの間、特訓の日々が続いた。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	8												

妙神山。

いい具合にお酒も入つて宴が盛り上がりを見せる頃、横島ら三人は中国王朝時代の官服に身を包み、場に姿を現した。

ただ、衣装を変えただけでも関わらず、半刻ほど前までと雰囲気がい

神や魔であるものたちが気おされるような、鋭い空気をはらみ、矛を、二胡を、笛を手に場を形成する。

ゆっくりと、構える。

手にした矛を軸に跳躍をする。

羽毛のように軽く舞う。

緩急がつけられた、笛と二胡の音を背景にまるで猫のように身軽に動き回る。

矛が小気味良い音を作り出す。

観客は杯を重ねる手を止め、魅入る。

音に、舞に。

心を奪われる。

絶え間なく作り出す情景を変える、奏で手と舞い手が場を支配する。

ゆったりとした衣装が、風をはらみ膨らむ。

武神に奉げられるにふさわしい。
否

これ以上ふさわしいものない、舞と樂。

人でありながらヒトでない、魔でありながらマでない。

いつそ、神に似た・・・

ただ見るものが目を離すことができない存在が、そこにある。

観客と呼べるものが自分たちしかないことが、残念で、この上なく誇らしい。

舞の後、しきりに酒を勧められる横島を、ちゃっかりと避難し猿神と杯を重ね旧交を深めている望とライが眺めていた。

早々に事情を話したことで、猿神と旧知であった為この二人に関して追求されることはなかった。

後日、妙神山で人知れず舞を舞ったことがどこからか判明したため、しばらくの間横島の生活は平穏とは程遠いものであったらしい。

e
n
d

泡沫の夢

荒れ果てた村。

その場所にひっそりと佇む一本の蠟梅。

人が住まなくなつて久しい家屋の庭に、手入れなどされているはずがないのに彩りを与える花。

桜のような華やかさの代わりに、馨しい匂いを村全体に漂わせ穏やかに春をもたらす。

緩やかに、慎ましかに季節の移り変わりを示す。

数日前、上司を通じてGSである自分に依頼が入った。

曰く「ダム建設の為に確保した土地に入れない」。

すでにその土地に住んでいた村人は他の地へと移っており、建設の為の機材等を運ぼうとしたのだが、どうやってもそこに入ることが出来ないというのだ。

何かしらの妖怪がらみではないかというのが現場の見解らしい。

依頼を了承し、その土地に出向くことになった。

香りに誘われるように奥へと進むと、一本の梅の木があつた。

「ようこそお越しくださいました」

その梅の木の陰から、ヒトではない何者かが現れて、優雅に腰を折る。

男にしては高く女にしては低い、耳に心地よく響く音。

纏った色は蘇芳、紅そして白。

後になって知ったことであるが、この色の組み合わせは『梅』というものらしい。

「君は、梅の精だね」

僕の問いかけに対し、化の者は”蕾が綻ぶように”微笑む。

「左様でございます。貴方のような方が来てくださるのをお待ち申し上げておりました」

言葉からも態度からも一欠けらの悪意も感じることができない。

「何故、このようなことをしたのか」

いつでも戦闘が出来るように重心をわずかにずらしながら対峙する。

「私は此处から離れることが出来ませぬゆえ、最期を看取っていたきたいと願っています。

それも、私の最期を意味あるものとして捕らえていただけ、妖とヒトとを繋ぐことができる方にと願っております。

願いが叶いまして嬉しく思います」

そのお礼ではありませんかと、手にしていた扇をかざす。

それは泡沫の夢。

悠久の時を生きた蠟梅のささやかな願い。

ただ一人の観客の前で、踊る。

簪を扇に乗せ、千里の先まで届ける。

幻想との狭間の世界。

樂もない。

ただ月の光だけが照らす舞台上、至高の舞は捧げられる。

それは祈りにも似た想い。

風が謳い、森が嘆く。

顔を上げると目に入る映像に頭を抱える。

恥ずかしい。

とてつもなく恥ずかしい。

確かに、本人である俺が見てもダレであるかは分からないようにうまく処理されていると思う。

だがしかし。

たとえ二時間のうちの数分程度のものとはいえ、死ぬほど恥ずかしいことには変わらない。

銀ちゃん主演の二時間スペシャルドラマ『踊るG5〜春の特別編〜』に何時の間にかゲスト出演することになり——依頼の時点で俺は猛烈に反対したが聞きえれてもらえず——割り当てられたのが絶対に似合わないハナノセイの役で——周りがやけに乗り気だったのだが——紆余曲折があり完成したのがコレである。

放映は来週の予定で、事務所に送ってきたビデオをみんなで見るのだが・・・何が面白いのか先ほどからこのシーンのみ繰り返し見せられているのだ。

俺は一回見た時点で帰ろうとしたのだが、無理やり引きとめられて上映会に参加させつつづけられている。
一種の拷問でないかと思うのだが・・・俺の意見なんて聞き入れてくれるはずもない。

横島にとっての拷問はまだ続く。

横島の思惑をよそに、この二時間ドラマは高い視聴率と反響を呼び、繰り返し放映されることになった。

- e n d -

泡沫の夢（後書き）

< m i k i k u n様感想ありがとうございます。
できる限り穏便な形で完結できるように努力いたします。

語り継がれる言霊

この業界には往々にして『二つ名』というものが存在する。極限られた、一部のモノに与えられる特権ともいえるが必ずしも好意的なものだけではない。

だが、あらゆる意味で『二つ名』は力を持つ。そして更に言霊にのせられた力ある言葉が、そのモノをより強大にしていく。

やがて、『二つ名』は持ち主の下を離れ一人歩きを始める。そうなれば止まらない。

たとえ持ち主であってもどうしようもなくなる。望む望まざるに関わらず本人をおいて拡散していく。

権力者の、風聞の、世間の、ついには歴史の中で、『二つ名』は語り継がれる。

結果『二つ名』は持ち主を塗りつぶす。

“ 悪 ” が生まれ、
” 善 ” が生まれ、
” 業 ” が生まれ、
“ 正義 ” が生まれ、

“ 有 ” と “ 無 ” が生まれる。

持ち主の意識関係なく『二つ名』によって定義が決められる。

いつそ無関心であってくれたらどれだけ救いになるか。
果てしなく続く渦の中で持ち主は磨耗していく。

自分にできることをしただけ。
ただ懸命に生きたかっただけ。
惚れたモノを護りたかっただけ。
手の届く範囲の幸せを願っただけ。

『覗き魔』、『煩惱少年』、『セクハラ男』
日頃の行いの結果だから痛くも痒くもない。

『人類唯一の文珠使い』、『魔神殺し』
…含むところがあるが…我慢しよう。

だがどうしても

どうしても男として。

『乞巧奠の舞姫』

この『二つ名』は消えてなくなって欲しいと切に願っている。

時をおかずして持ち主のあずかりの知らないところで、主にとある神族の仕業により望まれない『二つ名』が神界と魔界中に広がり、彼を示す最も有名な『二つ名』となる。

e
n
d

語り継がれる言霊（後書き）

次で終わりの予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1237s/>

GS - 舞 -

2011年7月1日01時04分発行